

## 再考：明治4年の銀行論争

鹿野 嘉昭

### 〈要旨〉

本稿は、明治4年の銀行論争と称される、ともに大蔵官僚であった伊藤博文と吉田清成との間で交わされた銀行のあり方をめぐる政策論議について再検討することを目的とする。その結果、伊藤が自説を曲げずにアメリカ流の国法銀行制度の導入を強く主張したため、伊藤案が採用されたとする通説とは異なる、次のような知見を導くことができた。すなわち、伊藤と吉田との論争は吉田が明治4年4月2日付の伊藤宛公書執筆に参加したことを契機に始まった。伊藤が自らの主張に固執したのは三井金券銀行の設立許可が取り消されるまでであり、その後、とくに目立った動きはみられない。銀行論争はむしろ、吉田がイギリス流の100%正貨兌換を強く主張したために長引いたのである。最終的には、高率での正貨兌換の実質的な確保、大蔵少輔への昇進という井上馨による提案を受け入れて吉田が折れたため、10月末までに資本金の4割は正金で払い込むことで決着した。